

阿岐のまほろば Vol.33

素焼きの皿が語るのは

おどいせき たかのちやうしらいち
御土居遺跡 (高屋町白市)



写真1 御土居遺跡出土の土師質土器皿

御土居遺跡は高屋町白市に所在し、調査地は古くから「御土居」と呼ばれ、中世の国人領主平賀氏の居館跡ではないかと伝えられてきました。低丘陵の先端に位置し、平賀氏の居城であった白山城を東に望み、北東に白市の町並みが広がってい

ます。遺跡中心部には平坦面が広がっており、その広さはおよそ東西90m、南北40mです。発掘調査は道路の改良事業に伴うもので、平坦面の中央を通るように幅約30mの帯状に行いました。

調査では屋敷内を区画した幅2mほどの溝や掘



写真2 御土居遺跡遠景（平成17年度）

立柱建物跡などが見つかりました。掘立柱建物跡は、建物の中に鍛冶炉跡があり、鉄を鍛えるときにでる鉄のかげら（鍛造剥片）が見つかったことから工場の建物跡であったことがわかりました。主要な建物は、未調査区域に当たる平坦面の西側部分に存在したものと推測されます。

また、調査区東側の溝や中央付近から大量の土師質土器皿（素焼きの皿）が見つかりました。（写真1・3）土師質土器皿の大量出土から何がわかるのでしょうか。

実は、宴会が頻繁に行われていたことがわかるのです。宴会も公的な儀礼の場であり、そういった宴会の場で、酒を飲む器は土師質土器皿を使っていました。壊れていない状態で見つかることも多く、一回の宴会に使ったものは次には使わずに捨てていたようです。素焼きの皿は一度使うと汚れが染み込むので、儀礼に使用したものは再使用しないのが原則であったようです。清浄の象徴として儀式や宴会の膳などで使われていました。

戦国大名朝倉氏が築いた城下町である福井県一乗谷でも大量の土師質土器皿が出土しています。特に朝倉氏の館の裏門近くからは堀の中に山のよ



写真3 土師質土器皿出土状況（白いのは巻貝）
うに堆積した土師質土器皿が見つかりました。

今回の調査で出土した土師質土器皿と一緒に16世紀後半の中国製の磁器（茶碗や皿）や巻貝が出土しています。巻貝は酒の肴でしょうか。

御土居遺跡の主要な建物などを見つけることはできませんでしたが、素焼きの皿を片手に宴会をしていた当時の様子が浮かび上がりました。そのときの酒はどこのものでどんな味だったのか、想像が膨らみます。

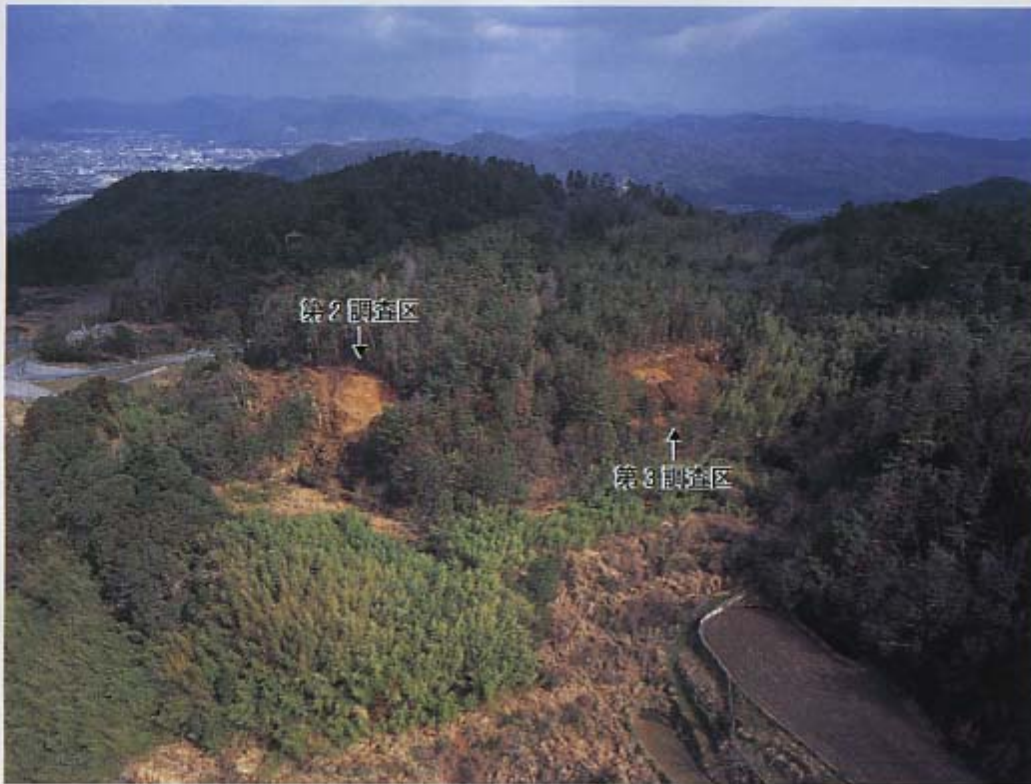
（長石）



図1 御土居遺跡位置図（1:25,000）

福成寺で中世の僧坊群を発見！

ふくじょうじきゅうけいだいせいき さいじょうちようしもみが
福成寺旧境内遺跡 (西条町下三永)



遺跡遠景

福成寺旧境内遺跡は西条盆地の南東部、洞山（標高544.6m）の北西に位置し、現福成寺を含む広い範囲にわたります。平成9年には現山門の前面で調査が行なわれ、石垣、基壇などが検出されています。現本堂を中心として、周囲の丘陵には斜面を削ったり、盛り土をして造られた小規模な平坦面が点在しており、寺院に関係した人々が活動した痕跡だと考えられていました。

平成17年2月から3月にかけて行われた今回の調査は、道路建設に伴うもので、その平坦面の一部が調査対象となりました。調査区は3つ（第1～3調査区）にわかれ、いずれも本堂から南に約150m離れた丘陵斜面に位置します。調査区の標高は約490mで、平野部との比高は270mです。

調査を行った結果、僧坊と思われる掘立柱建物跡、火葬のための土坑などが発見されました。

第1調査区ではもともと南向きの斜面に形成されていた窪地を利用して平坦面を造成しており、平坦面の中央で3間×3間の掘立柱建物跡（SB1）が検出されました。建物のまわりには排水溝が掘られています。谷側（写真上側）は現在の山



福成寺旧境内遺跡位置図 (1:50,000)



第1調査区 掘立柱建物（SB1）



第2調査区 掘立柱建物（SB5）

道がつけられたときに削られたようで、柱列はなくなっていました。

最も規模の大きい掘立柱建物跡（SB5）は第2調査区の窪地にあります。こちらも自然の窪地の山側を削って、7×7m程度に平坦面を拡張しています。建物は奥（写真右側）に狭まる敷地を最大限利用して建てられたため、柱の数は正面で5本、奥側で4本という変則的な建物でした。また、柱の並びも一直線にならず、素人が建てた建物のようにです。

また、第2・第3調査区では炭を多量に含む土坑が3基検出されています。第2調査区のSK1は長さ約3.5mの隅丸長方形の土坑ですが、床面が熱をうけて赤変していることから、火葬が行われた土坑と考えられます。炭の量と赤変の様子からは、何回かにわたって火葬が行われたと考えら



第2調査区 火葬のための土坑（SK1）

れます。

遺物は少量ですが、土師質土器・備前焼・青磁・鉄鏃・鉄釘などが出土しており、時期はおおむね15世紀後半が中心と考えられます。これらの遺構もその頃につくられたようです。

文献史料によると、福成寺の創建は平安時代にさかのぼるといわれていますが、14世紀末には大内氏の氏寺である興隆寺の末寺となります。15世紀前半には寺院としての最盛期を迎え、堂舎の造営が盛んに行われています。江戸時代の終わり頃広島藩によって編さんされた地誌書である『藝藩通志』の「下三永村絵図」には福成寺の坊跡として31字の堂と42の坊跡が記載されています。今回発見された僧坊群もこうした建設ラッシュにともなってつくられたものと考えられます。山間の斜面という限られた地形を利用してまで僧坊が築かれていることから、当時の福成寺の繁栄ぶりがうかがえます。

（唐津）

町東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿岐のまほろば Vol.33

発行日 2006(平成18)年3月24日

編集 財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター
発行 東広島市西条町馬木541-1

TEL 082-425-3880 〒739-0033

印刷 中本総合印刷株式会社
広島市南区大州五丁目1-1